向で一致した。それが北方四島返還に結びつくかは阿部総理の才腕に架かっている。

またプーチン大統領には焦りがあるのかも知れない。それはアメリカで頁岩からの採油が可能になれば、石油の自給自足が可能になり、当然中東への依存度が少なくなる可能性がある。

そうすると石油価格の暴落を招くかも知れない。また我が国周辺海域の海底からメタンハドレードの採掘のメドが付けばシベリアの資源に頼らなくとも我が国エネルギー源は確保できることになり、シベリア開発への投資熱は冷めることになる。

だからこそ１日でも速く平和条約交渉を始め、締結することによってシベリア開発に協力して欲しいということが本音かも知れない。その為には北方四島が重要なターニングポイントになる可能性がある。

国産ガス開発加速

メタンハイドレート 日本海で調査

佐渡南西沖では４月から試掘

輸入頼み脱却狙う

経済産業省は国産ガスを確保するため日本近海で開発事業を加速する。次世代資源と期待されるメタンハイドレートの日本海側での埋蔵量調査を今夏に始める。メタンハイドレートの埋蔵を確認した太平洋側では3月から試験生産する。佐渡南西沖では4月から石油と天然ガスを試掘する。新たな埋蔵調査と、過去の調査を踏まえた試掘を同時に進め、エネルギーの輸入依存体質から将来、脱却することを目指す。

日本海側で調査するのは海底数㍍から数十㍍の浅いところに分布する表層型と呼ばれるメタンハイドレート。天然ガスの主成分であるメタンを大量に含む。2012年夏以降に明治大学などが細

走沖や秋田・山形沖で試料の取得に成功した。広域に分布する可能性が高まったため、今夏から3年かけて北海道から島根の沿岸5～6地域の広範囲で埋蔵量を調べる。

表層型のメタンハイドレートは日本海側では03年福島第1原子力発電所の事故後に火力発電に使った。採算性が不明で政府は調査・研究を見合わせていたが、11年の東京電

には大規模な永久凍土層メタンの周りを氷が囲んだ氷状の塊で、分解すると体積の160～170倍のメタンガスが出る。「燃える氷」と呼ばれ次世代エネルギーとして期待が高い。低温高圧の条件で存在する。カナダの永久凍土層など陸上で見つかった例もあるが、日本

▼メタンハイドレート 天然ガスの成分であるメタンの周りを氷が囲んだ氷状の塊で、分解すると体積の160～170倍のメタンガスが出る。「燃える氷」と呼ばれ次世代エネルギーとして期待が高い。低温高圧の条件で存在する。カナダの永久凍土層など陸上で見つかった例もあるが、日本

はなく、海底に存在する。石油や石炭と比べて燃やしたときの二酸化炭素排出量が少ないため、環境対策としても注目され「燃える氷」として期待される。産業技術総合研究所によると、日本には国内の天然ガス消費量の約100年分のメタンハイドレートがあると推定される。

させないため埋蔵の可能性のある海域を幅広く調査する。

埋蔵を確認済みの太平洋側の渥美半島・志摩半島沖では、石油・天然ガス・金属鉱物資源機構（JOGMEC）と産業技術総合研究所が砂層型と呼ばれる海底深くのメタンハイドレートの産出試験に乗り出した。海底から産出できれば世界で初めてとなる。1月28日に調査船が到着し、3月中にもガスを試験生産できる見通し。周辺の東南海トラフ地域には日本のLNG輸入量の11年分に相当する資源量が確認されており、今後どれだけの量を利用できるかが焦点となる。

日本海の佐渡南西沖では石油・天然ガスの試掘も始まる。JOGMECの委託を受けてJX日鉱日石開発が4～6月に試掘する。08年から始まった3次元物理探査船「資源一」の調査で埋蔵の可能性が指摘されていた。

地元の期待も高い。日本海側の1府9県は12年9月に「海洋エネルギー資源開発促進日本海連合」を立ち上げた。将来的に日本海側でメタンハイドレートや石油を開発できれば沿岸府県に拠点施設ができ、産業や雇用の活性化につながる可能性がある。